学校教育活動全体を通した音楽教育の充実について

郡山市立郡山第二中学校
教諭　本田　あゆみ

１　はじめに

音楽科の最終目標は、子どもたちの豊かな情操を養うことであり、また、本校は「文化の香りと学力、そして魅力度・満足度の高い学校」を目指して、全教職員で一致協力して学校の教育活動に当たっている。とりわけ文化の香りに関しては、音楽教育の果たす役割が非常に重要であることは間違いない。しかし現在、音楽科の授業時数は、１年生で週約 1.3 時間、２，３年生にいたっては週１時間しかない。このような状況の中で、いかに「文化の香り」を高めるかを考えたとき、まずは、音楽の授業をいかに充実させ、生徒一人ひとりに音楽の基礎力を身につけさせるかを第一に考えた。さらにその基礎の上に、合唱コンクールなどの学校行事の指導において、生徒の思いが形になる表現力を磨く指導、また、顧問を務める管弦楽部の部活動など学校教育活動全体をとおして音楽教育の充実を図る必要がある。

以下、音楽の授業、学校行事における音楽指導、管弦楽部の部活動指導を関連づけることにより、学校教育活動全体を通して行った音楽教育の充実について述べる。

２　音楽の授業について

音楽の授業については、本校全学級の授業を担当していることを生かして学校全体で統一感のある指導を行うことが可能であった。音楽の基礎力となる、読譜力を身につける学習の他、聴音にも力を入れた。器楽ではアルトリコーダーやギター、和楽器演奏など幅広い活動を通して、生徒の音楽を愛好する心情を育てることを第一に、授業研究に努めた。その中で、今年度は本校の現職教育のテーマに即して特に合唱指導において、次の３点について工夫した実践を行った。

（１）　みんなでやり抜こうとする雰囲気を醸成するための工夫

①　成果

授業導入段階で、自分の歌唱（前時の自分の動画）について確認させ、個々の課題を設定させた。各自の課題を共有することによって、本時の目標・課題設定が明確なものとなり、生徒一人ひとりが自分の課題達成のために何をどうすればいいのかいろいろな方法で課題を追究するなど、主体的な活動が見られた。また、個々の努力や向上点を相互に認め合う時間を設け、互いに賞賛し合うことで、合唱活動の喜びや楽しさを分かち合い、自信を持って活動する姿が見られた。一人一人が一生懸命に取り組むことが、学級全体の歌唱力向上につながっていくという自覚が生まれ、その結果、全員で課題を達成していこうという雰囲気が醸成された。

②　課題

個々の歌唱力、歌唱に対する意欲、学級の人間関係や雰囲気によって、授業展開に差が生まれてしまった。歌唱技術を向上させるとともに、歌唱意欲を喚起させるまでに学級間で差異が生じてしまった。授業外での生徒との関わり方や、生徒の全人的な理解、授業でのラポートが図れる関わり方などをさらに工夫していきたい。

（２） 課題設定と課題を達成させるための工夫

① 成果

正しい音程で歌えるように「１フレーズだけ」のように歌唱範囲を決め、他のパートと一緒に、つられないで歌えるようになるまで、反復して歌唱させた。テンポを変え、音高のイメージを持たせ、他の音を聞きながら歌えるまで反復させることで、歌唱力が定着していった。正しい音程で歌えるようになると、合唱そのものに対する意欲の向上も見られた。また、生徒相互での教え合い、支え合いの活動を積極的に取り入れることで（後述する、管弦楽部の生徒など音楽に対する興味関心が高い生徒を中心とした教え合い、支え合い）生徒が主体的に学び合い、高め合う姿など「主体的・対話的で深い学び」を実現することができた。

授業の終末ではＩＣＴ機器を活用し、各自の歌唱や全体の演奏を録画し相互に鑑賞し合い自己評価や全体での評価を実施することで、次時の目標設定に効果的につなげることができた。

② 課題

正しい音程の定着とともに、正しい発声方法など身につけさせたい技能が多くあるが、一人一人課題が違うため、限られた時間で効率よく指導できる方法、いわゆる学習の個別化をさらに工夫していかなければならない。

（３） 個別指導の工夫

① 成果

一人ひとりへの助言や成長した点を積極的に認めることによって、自信をもって歌唱できるようになった。また、音程が正しくとれない生徒は、休み時間等に個別指導を行うことによって、歌う意欲を向上させることができるなど「主体的・対話的で深い学び」を実現するための基盤とすることができた。また、集団の中の一員として、自分の役割を果たすための誠実な取り組みの大切さを教授する機会にもなった。

② 課題

授業の中で行える個別指導には限界がある。週に１時間しかない授業であるため、いかに時間を確保して繰り返し指導できるかが問題となる。そのため、多くの生徒に共通な指導事項については、次項で述べる学校行事における音楽指導でも繰り返し指導するように配慮した。

【主体的・対話的で深い学び】

３　学校行事における音楽指導

入学式や卒業式など儀式的行事においては式歌を歌う機会は、重要な音楽教育の一環であり、特に卒業式は１，２，３年生、それぞれの学年にとって集大成となる場となるため、音楽の授業との関連を重視して指導することとした。

特に、新型コロナウィルス感染症が蔓延していた頃は、全校合唱はおろか学級の合唱さえ感染リスクの高い教育活動として厳しい制限が加えられていたこともあり十分な指導ができなかったが、現在ではそれも緩和され効果的な指導ができるようになった。

文化祭における合唱コンクールは、特に音楽の授業と関連が深く、また生徒のモチベーションも高いため、音楽教育のさらなる充実が期待される。

（１）　校歌・式歌指導における音楽教育の充実

①　成果

入学式における校歌の指導については、新２，３年生は卒業式での指導の成果が十分に残っているため、短時間で行うことができた。しかし、年度初めということもあり、入学式終了後においても、改めて音楽の授業において校歌の指導を適切・効果的に取り入れることにより、以後の歌唱指導の基盤とすることができた。２，３年生については、入学式終了後に多くの賞賛を受けたこともあり、非常に積極的に歌唱学習に取り組むことができ、学校行事での指導と授業が相互に良い影響を与えられたと実感できた。

卒業式の式歌指導においては、学校の音楽教育の１年間の集大成として位置づけ、全校生徒に音楽の授業はもちろん、全校集会等においてその意義と重要性について指導するとともに、音楽教育の観点からこれまでの学習の成果の発表の場であるという自覚を持たせた。

このことにより、生徒は式歌練習を音楽教育の一貫としてとらえ、卒業生ばかりでなく、１，２年生も主体的に式歌の練習に取り組み、より一層の音楽教育の充実を図ることができた。また、思いを形にすることができる歌唱を通して、誠実に音楽に向き合う生徒の姿から、それぞれの学年の心の成長を感じることができた。

②　課題

コロナが５類になり、全校生で歌唱する機会も少しずつ戻ってきたとはいえ、昨今は夏の熱中症対策など、１学期終業式や２学期始業式などを放送による実施に切り替えることもあり、１年間を通して全校生で一堂に会して合唱する機会を設けることが難しくなってきた。

（２）　合唱コンクールの指導における音楽教育の充実

①　成果

合唱コンクールの指導については、授業におけるＩＣＴを活用した個別最適な学びや、後述する管弦楽部員など学級のリーダーの積極的な関わりなどにより、生徒一人ひとりの歌唱力はもちろん、学級全体さらには学校全体の歌唱力を飛躍的に高めることができ、音楽教育の充実につながった。郡山市内の中学校の代表学級が演奏を披露する「郡山市音楽学習発表会」では、本校の代表学級の歌唱について多くの学校関係者の方々から高い評価を得たことからも、歌唱力の向上を実感することができた。

４　部活動（管弦楽部）を通した学校音楽教育活動の充実

管弦楽部に入部する生徒は、音楽に興味・関心が高い生徒が多く、部活動の指導を通して学級や学年における音楽教育のリーダーとして育てば本校の音楽教育のさらなる充実が図られると考えた。部活動はあくまでも教育活動であり、コンクールのためだけの活動や練習に終始することなく、生徒の自主性を重視し部活動で学んだことや身につけたことを、音楽の授業や学校生活の中で望ましい形で発揮していくことを生徒には求めて、部活動指導を行ってきた。

（１）部活動を通したリーダーの育成

①　成果

合唱コンクールでは多くの管弦楽部員が学級の指揮者や伴奏者、パートリーダーなどを進んで引き受けたり、音楽授業における対話的な学びではリーダーとしての役割を遺憾なく発揮したりするなど、授業の活性化に寄与することができた。

②　課題

管弦楽部以外の生徒にも、活躍する場を意図的に設定してきたがまだまだ多くの生徒の音楽の資質・能力を向上させることができる余地がある。

５　まとめ

音楽科教員として、音楽科の役割はこどもたちの心を育てること、豊かな情操を養うことであると考える。その中には、我慢することや辛くても努力し続けることなど、人間力を育むことも含まれている。学校生活のあらゆる場面での生徒との関わりを通して、生徒の理想とする自己像や願いなどについて、理解を深め、それらを実現するために、少ない授業時間の中でいかに学校の音楽教育の充実に取り組むべきか今もなお模索しているところである。教えるべきことは、生徒ができるようになるまで繰り返し教えること、生徒の思いを形にできるまで、時間や労力をいとまず、指導にあたることで、生徒ははじめて主体的に学ぶことができるようになるのだと改めて感じた。限られた少ない時数の中での音楽教育の充実に関しては、今後さらによき方向へと発展、進化に努めなくてはいけないと感じる。今回の受賞に満足することなく、さらなる研鑽を積み、指導力向上に励んでいきたい。

【日本学校合奏コンクール２年連続日本一を受賞して】